

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 24 日現在

機関番号：32682  
 研究種目：若手研究（A）  
 研究期間：2009～2011  
 課題番号：21682003  
 研究課題名（和文）19世紀中葉の日蘭交渉史

研究課題名（英文）The Dutch Japanese relations in the mid-nineteenth century

## 研究代表者

小暮 実徳（KOGURE MINORI）  
 明治大学・文学部・兼任講師）  
 研究者番号：90537416

## 研究成果の概要（和文）：

本研究の深化のため、インドネシア、オランダ、アメリカ、イギリスにおける長期現地調査を行った。それにより非常に広範囲な研究が出来た。具体的には当該国における史料調査を十分行い、そこでその貴重な未公開史料から、多くの新知見を得ることができた。この成果は論文・エッセイとして公表した。更に本期間、多くの研究者との交流ができたことは、自らの研究上のみならず、国際化の視点においても、極めて意義深かった。

## 研究成果の概要（英文）：

In the period covered by this report research was conducted in Indonesia, the Netherlands, the US and the UK. This research was aimed at searching, discussing and collecting unpublished documents in various archives. Consequently several articles and essays based on these documents were written and published. Moreover, these research trips made it possible to establish contact with a large number of international researchers. As a result the visits constitute a successful contribution in the area of international academic exchange.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2011年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	5,100,000	1,530,000	6,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：日蘭交渉史

## 1. 研究開始当初の背景

日蘭交渉史は周知のテーマであり、所謂

「鎖国」期においても、日本と貿易関係を有していた唯一の西欧国として、我が国でオランダは特に知られている。しかし1853年ア

メロカ合衆国ペリー司令官の日本遠征以降、日本史上、オランダという名は姿を消し、その後は主として、英米仏等の欧米列強との関係史が中心となる。この学術背景を疑問に思い、その真相を探るべく、幕末期における日蘭外交関係の研究を志した。

東京大学名誉教授・日蘭学会常務理事の故金井圓先生から日蘭交渉史に関して指導と激励を受け、オランダの史料を中心に対日外交政策を検討することに決め、オランダに渡り、1997年9月から2007年12月まで、オランダ王国ライデン大学で幕末期のオランダ対日外交政策を研究した。この成果が『国家的名声と実益—1850—1862年までのオランダ対日外交政策』（Minori Kogure, *National Prestige and Economic Interest - Dutch diplomacy towards Japan 1850 - 1863*, Maastricht, 2009）と題する同大学博士請求論文である。この論文により、オランダ外交史研究の中では、ほとんど政治外交的に重要視されて来なかった日本関係を、当時オランダが保有していた蘭領東インドとの政治・経済的配慮から、極めて重要な問題であったことを一次史料から位置づけ、また日本史研究においては、幕末期に始まるその開国史において、今まで欠如していたオランダの役割を位置づけた。

このような背景から、更に自身の研究を深化させるべく、旧蘭領東インドであるインドネシアの国立公文書館が有する日本関係文書、更に日本の開国に決定的な役割を果たしたアメリカ合衆国の当該文書の検討を志した。インドネシア国立公文書館（ANRI）は旧蘭領東インド文書を保有している。重要な文書（蘭領東インド評議会決議等）は本国に送られるが、それに至る細かな議論は本国には送られない。そこで実行機関である蘭領東インドで、実際どのような日本問題に関する詳細な議論がなされたかを理解することは、極めて重要と思われた。またアメリカ合衆国文書館（NARA）が有するペリー日本遠征に関する文書の検討は、アメリカが、実際どのような対オランダ政策を考慮していたのかが理解されると思われた。このような問題は、現在まで具体的には分かっておらず、そこでこの新視点からのインドネシア・アメリカにおける調査により、当時の日本の近代化過程における、オランダ、更には他の欧米諸国の役割・動向が史料的に浮き彫りにされ、欧米諸列強による対日本開国政策の全体像が明らかになると思われたのである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、幕末期のオランダ対日外交政策を、未だほぼ未公開である当時の蘭領東インド（現インドネシア）の、また英米の

日本関係文書を広く、また徹底的に分析・検討することで、新視点から、当時の日本の近代化過程における、オランダ、更には他の欧米諸国の役割・動向を史料的に浮き彫りにし、当時の歴史の全体像を構築することである。

オランダでは1862年までオランダ植民省が、日本問題を管轄した。地理的考慮から、その下級官庁である蘭領東インド政庁が、日本問題、主として日本貿易を実行・指揮した。幕末期以前では、同問題はほぼ貿易のみに限られていたが、幕末期からはアジアにおける欧米列強の活動は積極的となり、同政庁内では日本問題に関わるそのアジア外交に関して、十分な考慮がなされていたと考えられた。インドネシア共和国国立公文書館（Arsip Nasional Republik Indonesia, ジャカルタ）は旧蘭領東インド政庁文書を保有している。重要な文書（蘭領東インド評議会決議等）は本国に発送されるが、それに至る細かな議論は本国には送られない。そこでオランダでは、この種の議論・考慮を知ることができない。そこで実行機関である蘭領東インド政庁内で、実際どのような日本問題に関する詳細な議論がなされたかを理解することは重要と思われた。

またアメリカ合衆国文書館（NARA）が有するペリー司令官日本遠征に関する文書の検討も、極めて興味深かった。『ペリー日本遠征記』は、既出版され、日本語訳にもなっている。またこの問題を扱う研究書としてワイリー（Peter Booth Wiley）の著作（*Yankees in the Land of the Gods : Commodore Perry and the Opening of Japan*, 1991）がある。ワイリーは文書館の調査を広範囲に行い、十分な史料を用いて、同問題を検討しているように思われる。しかし彼は純粋な歴史学者ではなく、その歴史考察の視点は大変興味深い。史料の扱い方に問題があるようにも思われた。そこで直接自ら検討する必要があると感じた。さらに本著作内では、オランダに関する史料はほとんど用いられていない。そこでアメリカが日本遠征を行うに際し、どのようにオランダ側を観察し、その対日政策を展開して行ったかは、自らの研究視点から極めて重要であった。

同時にこれらの問題を、一層周知させるためには、その史料の公表が重要と思われた。そこで19世紀のオランダ対日外交政策に関する史料集を公表することを目的とした。ここから本研究の主な活動は、オランダ、インドネシア、アメリカ、イギリスにおける史料調査、関連研究書の収集、特に一次史料の収集、解説、翻字、分析が中心となった。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は、主に外国語の一次史料の徹底的な分析・検討により、新しい角度からその当時の歴史を再構成することにある。そこで当該諸国での長期滞在研究が、必要不可欠であった。本研究の主な活動は、オランダ、インドネシア、アメリカ、イギリスにおける史料調査、関連研究書の収集、特に一次史料の収集、解読、翻字、分析を中心とした。そのためには現地研究者の協力も不可欠であった。

#### 4. 研究成果

本期間、インドネシア1回、オランダ3回、イギリス1回、アメリカ2回と、計7回にも及ぶ広範囲な調査が行えた。現地訪問は、多くの困難も伴う。しかし、特に近現代を専攻する者にとっては、その当時の雰囲気をも十分に残している現地への渡航、その場所での滞在経験は、その歴史認識に、より一層の視角を得ることが出来ると考えている。この点で、非常に貴重な経験を得ることが出来た。特にインドネシア、アメリカの国立公文書館は、それまで調査したことがなく、非常に重要な史料を分析・検討・収集することが出来た。またこの期間、現地研究者並びに、関係研究者との活発な交流ができ、現地の実情、最新の研究動向を理解できたことは極めて意義深かった。

以下具体的な成果を述べる。

インドネシア渡航では、まず現地の史料の保存状況が把握でき、そこで自らの関係文書が未だ分類されておらず、閲覧が困難であることが理解された。しかしながら幾つかの重要な史料を見ることが出来た。また現地で偶然発見した史料から、「オランダ人技術者リンド兄弟」と、現地における研究滞在の経験から、「インドネシア短期研究滞在を充実させるために - インドネシア国立文書館 (ANRI) における調査を例にして」と題する、二つのエッセイ、更には『江戸時代来日外国人人名事典』の作成に役立った。更に一論文を作成したが、現在未発表である。

アメリカ渡航では、現地史料により、新規的な論文を作成できた。ワシントンにおける国立公文書館・議会図書館での成果は、拙稿「ペリー日本遠征の再検討とその真意 - アメリカ合衆国国立公文書館・海軍省ファイルに含まれる未公刊関係史料の検討から」として纏め、明治大学創立130周年記念懸賞論文に投稿し、最優秀賞を獲得した。これは既に英訳し、現在海外の雑誌に投稿し、審査中である。またニューヨーク・シティカレッジでは、『タウンゼント・ハリス個人文書』に含まれる「ハリスの手紙」に関する新知見を得、好意的な史料閲覧のみならず、研

究促進のために、様々な便宜を図ってもらえた。ここでは同文書のマイクロフィルム版の購入、またこの「ハリスの手紙」の、同大学文学部長であった故コセンザ教授がタイプさせたマニスクリプトを全て撮影し、検討した。この研究は、今後基盤研究(C)のプロジェクトに引き継がれることになった。

イギリス渡航では、現地国立公文書館で、英蘭・英米関係の史料の搜索、分析・検討の作業を行った。重要な史料は、デジタルカメラで収集した。

以前長期滞在をしていたオランダでは、ライデン大学、特に同大学スカリヒャー研究所から、研究継続に十分な環境が提供された。そこで活発な研究者交流、今後の研究の進展等に、十分な便宜を得ることが出来た。オランダ渡航では、19世紀中葉のオランダ対日外交関係に関するオランダ語史料集出版計画が中心となったが、本期間での出版できなかった。しかし翻字テキストは、十分に校訂できた。この種の出版は、常に出版社等の問題が伴う。しかしながら個人での出版であれば、問題がない。近い将来、一番良い公表の仕方を決定する。

上述のように、本期間内では、自らの既存の研究を深化させること、また今後の研究の点で、極めて意義深く、重要な機会を持つことが出来た。記して感謝の意を述べたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7件)

- ① 小暮実徳、海外短訊「インドネシア短期研究滞在を充実させるために - インドネシア国立文書館 (ANRI) における調査を例にして」、『広島東洋史学報』、査読有、第14号、2009年、98-104
- ② 小暮実徳、「浦安はじめ関東における測量家としての I. A. リンドの活動に関する史料 - 「ご飯にお茶 - リンド日本書簡集」から」、『Journal of Hospitality and Tourism』、査読無、第5号、2009年、25-38
- ③ 小暮実徳、「シェイス著『オランダ日本開国論』付属資料 III 『ペリー提督日本遠征記』への反論」とその考察 - 幕末期のアジアにおける欧米列強の国際関係を背景として」、洋学研究史『一滴』(津山洋学資料館紀要)、査読無、17号、2009年、19-38
- ④ 小暮実徳、「オランダ人技術者リンド兄

弟』、『日蘭学会通信』、査読無、第 134 号、  
2010 年、4-5

- ⑤ 小暮実徳、「シェイス著『オランダ日本開  
国論』付属資料 II 「オランダ海軍日本分  
遣隊の歴史」、洋学研究史『一滴』（津山  
洋学資料館紀要）、査読無、19 号、2011  
年、1-85
- ⑥ 小暮実徳、「ペリー日本遠征の再検討とそ  
の真意 - アメリカ合衆国国立公文書館国  
務省・海軍省ファイルに含まれる未公刊  
関係史料の検討から」、明治大学創立 130  
周年記念懸賞論文人文科学分野最優秀賞、  
査読有、2011 年、1-16
- ⑦ Minori Kogure, The Motives for Perry's  
Expedition to Japan Re-examined -  
Based on a study in the archives of the  
Department of the Navy and the  
Department of State in the National  
Archives of the United States, 130<sup>th</sup>  
Anniversary of the Founding of Meiji  
University Commemoration Project, 1-26  
(上述論文の英訳)

[学会発表] (計 3 件)

- ① 小暮実徳、「幕末オランダ対日外交関連史  
料の状況 - インドネシアとオランダの国  
立公文書館での現地調査から」、洋学史学  
会例会、順天堂大学、2010 年 6 月
- ② 小暮実徳、「ペリー日本遠征の再検討とそ  
の真意 - アメリカ合衆国国立公文書館国  
務省・海軍省ファイルに含まれる未公刊  
関係史料の検討から」、明治大学創立 130  
周年記念研究者シンポジウム「グローバ  
リゼーションと東アジア - 150 年の歴史  
から」、明治大学 2011 年 11 月 19 日
- ③ 小暮実徳、「出島 (Dejima) - 世界を繋  
いだ小さな窓」、洋学史研究会、ホテ  
ル・サンルート、2012 年 1 月 29 日

[図書] (計 1 件)

岩下哲典編、『江戸時代来日外国人人名事典』、  
東京堂出版、2011 年 9 月、小暮担当  
pp.52-56、pp.64-65、pp.66-67、pp.68-75、  
pp.76-84、pp.85-86、pp.142-211

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：

権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小暮 実徳 (KOGURE MINORI)  
明治大学・文学部・兼任講師  
研究者番号：90537416

### (2) 研究分担者 ( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者 ( )

研究者番号：